

かたりべ110

豊島区立郷土資料館だより



上：縦 120 × 横 170 × 幅 58cm
地元の杉と秋田杉の特徴を生かして作る。ハンドルは鍛冶職人製作。

左：建具職人として現役の本吉好文さん（昭和9年生まれ）

（2013年11月7日撮影）

資料館に新しい唐箕が来た！

資料館には古い農具があり、どのように作られているのかわからなくなったり動かしてみたくなくなるものがあります。そのひとつが、これから紹介する唐箕ちやみです。唐箕は、本体の横についたハンドルを回して風を起し、漏斗じょうごから入れた米や麦などの穀物の粒の大きさを選び分ける道具で、軽いごみは、吐き出し口の外に飛び出します。

豊島区の元農家では、唐箕を、昭和三〇年代まで使っていたそうです。では、唐箕は、いつ、だれが作ったのでしょうか。小学生が使う教科書や百科事典には、唐箕が描かれているものがあります。そこで、新しく唐箕を作り、みんなで使うことはできないかと考えました。唐箕は、全国各地で使用されていました。機能はほぼ同じですが、地域により形に多少の違いがあります。豊島区の唐箕は、特に南関東で多く使用された形で、現在の千葉県君津市域で製作されたものであることがわかりました。唐箕を作ってくれる方がいらっしゃるか、人から人へ尋ね探し、ついに、君津市立久留里城址資料館が、唐箕製作の経験者を紹介してくださりました。

二〇一三年夏、本吉好文さんに製作のお願いに伺ったとき、五〇年以上も前の経験だから作れるかなと話されていましたが、秋、できあがりしました。「職人は、腕を見込まれて頼まれることが誇りなんだよ」と言ってくれました。今回、唐箕の製作工程の一部を見て驚いたことは、部材の杉板に、赤色の顔料のベンガラを塗っていたということです。資料館にある唐箕は戦前に作られた使われたものであるため、全体的には茶褐色です。しかし、よく見ると、細部に、その色が残っていました。

今、新しい唐箕は、出番を待ちわびています。

（福岡）

「仮称」芸術文化資料館建設予定地区の発掘調査——土層剥ぎ取り標本の作製——

郷土資料館では現在、「仮称」芸術文化資料館の準備を進めています。その建設工事に先立ち二〇一三年八月一九日から二四日の期間に、千早二丁目三九番

の「仮称」芸術文化資料館建設予定地区において発掘調査を実施しました。この調査は、当該地の土層剥ぎ取り標本の作製、および堆積土層の自然科学分析試料採取を目的として実施したものであり、埋蔵文化財包蔵地での一般的な発掘調査と性格を異にしますが、この場所の旧地形や古環境を探る上で多くの貴重な成果を得ることができました。

土層剥ぎ取り標本とは、過去の人類の活動痕跡である遺構や、自然堆積により形成された土層の断面を薄く剥ぎ取った実物標本です。博物館の展示において、貝塚や落とし穴等の断面を剥ぎ取った標本や、その地域の土層を剥ぎ取った標本を目にしたことがあるかもしれません。今回の調査では、深度約四メートルの調査区を設け、旧平和小学校校庭にあたる現在、私たちが暮らしている生活面から、三万年以上前、旧石器時代までの土層堆積状況を観察することができる剥ぎ取り

標本を作製しました。標本の大きさは、およそ幅一メートル、長さ四メートルになります。

標本作製の手順としては、まず調査区を設定し、重機による掘削を行います。次に土層を観察し、大型の石やコンクリート片を避けながら、剥ぎ取る範囲を決め、表面をできるだけ平らに整えます。ここに、水と反応して固まる性質を持つウレタン系樹脂を塗り、裏打ち布を貼り付けます。その上からさらに樹脂を塗り、裏打ち布と土層の間の空気を抜きながら、密着させていきます。時間が経つと、透明だった樹脂が、白く濁り固まってくるので、三〜四時間乾燥させた後に、標本を剥ぎ取ります。

この「仮称」芸術文化資料館建設予定地区の立地する地形は、台地平坦面より若干低くなっており、ほぼ南に向かって伸びる浅い谷の谷頭付近に位置します。隣接する栗島神社は谷端川の水源地であり、本地区もかつては、谷端川の河川敷でした。一九〇九年（明治四二年）の地図からは、谷端川に沿って両岸に水田が広がっていた様子が確認できます。

標本作成を行った調査区北壁の断面は、周辺地域における既知の土層と対比しながら、I層からX層までに分けました。

I層は、旧平和小学校の校庭盛土・整地土およびそれ以前の耕作土に分けられ、I d層が、水田の耕作土であったと考えられます。このことは、植物珪酸体分析で、栽培植物のイネ属、湿潤な場所に生育するヨシ属が見つかったことからわかります。植物珪酸体とは、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸が蓄積したもので、植物が枯れても、微化石となつて朽ちることなく土壌の中に残り続けます。その形状から種を特定することが可能であり、水田跡の探査や古い環境の復元に利用されます。また、標本右側のI a層からII c層にかけて、コンクリート片を多く含む現代のゴミ穴を見ることができま

す。II b層は、平安時代の一一〇八年（天仁元年）に浅間火山から噴出した、浅間Bテフラに由来する軽石が見つかったことから、平安時代頃にできた土層であると考えられます。テフラとは、火山から噴出した火山物質が堆積したものの総称



1. 重機による調査区の掘削



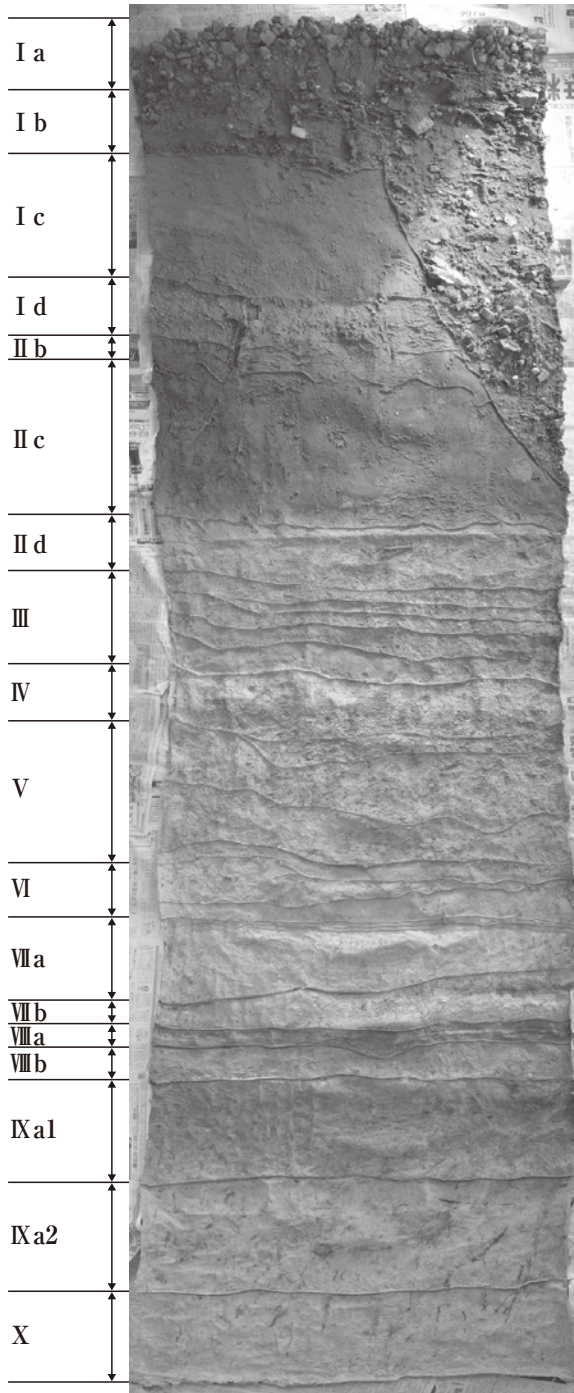
2. 土層へ裏打ち布の貼り付け



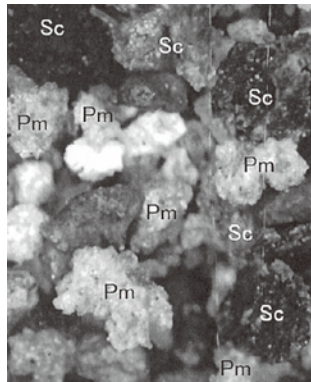
3. 塗布した樹脂の乾燥待ち



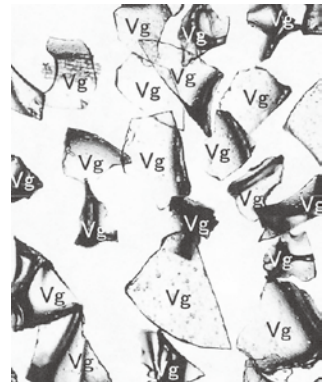
4. 乾燥した標本の剥ぎ取り



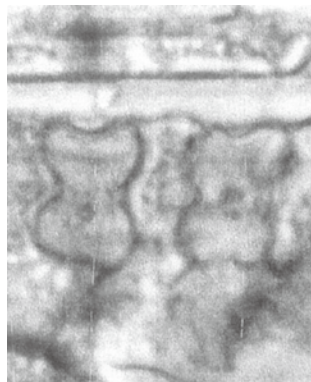
土層剥ぎ取り標本の全体写真と各層名



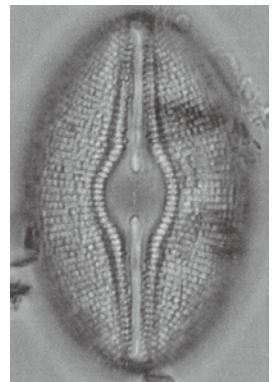
軽石(Pm)と新期富士テフラのスコリア(Sc)(IIb層)



始良Tn火山灰(AT)の火山ガラス(Vg)(VIIa層)



植物珪酸体
イネ属短細胞列(Id層)



珪藻化石Diploneis yatukaensis
Horikawa et Okuno(V層)



大型植物遺体
オモダカ科種子(X層)



木材
ハンノキ<根材>木口(X層)

このほかに、海や川から湿った土壤まで様々な環境で生育し、水質や水の流れの強弱によって多種多様に棲み分けを行う珪藻を利用した珪藻化石分析、花粉分析、抽出された木片の樹種同定や、種子・果実・大胞子などの大型植物遺体同定を通じて、各時代の古環境復元に取り組んでいます。また、神田川流域に位置する学習院周辺遺跡千登世橋中学校地区をはじめとして、他の発掘調査成果と合わせ、土地に刻まれた歴史の具体的なイメージを捉えることのできる展示となるように、新館準備を進めて行きます。(甲田)

で、土層の年代を判断する基準に用いられます。IIc層は、上部に、二二〇〇〜三五〇〇年前に富士山より噴出したテフラに由来するスコリア(暗色で多孔質の火山噴出物)、下部に、一・五〜一・六万年前に噴出した立川ローム層上部ガラス質火山灰(UG)に由来する火山ガラスが少量見つかったことから、縄文時代頃にできた土層と考えられます。また、VI層上部に相模野第一スコリア(S1S)、VII層最上部に始良Tn火山灰(AT)のブロックを確認できます。特にATは、鹿児島県始良カルデラを供給源とする広域テフラで、二・六〜二・九万年前頃に噴出したとされています。

旧高田町公文書と五十子善三良

平成六年（一九九四）、当館に「測量図面及び高田地区関連文書類」が寄贈され、「測量図面」の整理を中心に進められてきました。資料の成立年代は明治末期から昭和六十年代までと幅広く、内容は高田・雑司ヶ谷地区における私有地の測量図面や道路の拡幅に伴う図面、公共施設・事業（学校・役場）の設計図面等が確認されました。

本年度より「高田地区関連文書類」の整理に着手することになり、整理は未だ途中で公開はできませんが、文書群の全体像とその実態が確認されつつあります。その経過についてご紹介いたします。

「高田地区関連文書類」は、旧高田村（現在の高田一〜三丁目、目白一・二丁目、雑司ヶ谷一〜三丁目、南池袋一〜四丁目）の公文書（行政文書）であることが分かりました。その理由は、文書作成者あるいは関係者として重要人物である「五十子善三良」の存在が関係しています。

この資料の中に、昭和七年（一九三二）東京市に提出するために作成された

いそごぜんざぶろう 五十子善三良

五十子善三良の履歴書が確認できました。その略歴について簡単に述べますと、以下の通りになります。

「大正五年四月、税務係に任命。
同七年七月、税務主任に任命。
同八年十二月、収入役代理に就任。
同十二年三月、税務課長に任命。
同十四年四月、高田家屋賃借価格調査主任を嘱託する（東京府知事）。

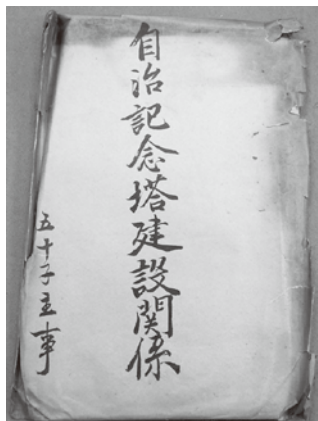
昭和二年五月、土地賃借価格調査員を嘱託する（税務監督局長）。
同四年八月、庶務課長に任命。
同五年七月、国勢調査員に任命。
同六年四月、下水道経理課長に任命。
同七年三月、町長秘書に任命。

同年同月、市郡併合調査事務主任に任命。この文書群には、旧高田村が大正九年（一九二〇）町制施行により高田町となり、昭和七年に巢鴨町・西巢鴨町・高田町・長崎町が統合し、豊島区が成立するまでの資料を多く含んでいます。

五十子善三良は、略歴からも分かりますように、当時町長であった中山昶三（昭和三年一月就任）や海老澤了之介（昭和四年九月就任）によって行われた

道路台帳の作成や官民地境界・隣接市町村境界の査定業務や当時町の一大事業であった下水道敷設計画などに関わっていたことが分かります。

五十子は後に町長の秘書までも務めているためか、事業ごとに書類を封筒に入れたり厚紙で挟んだりして、分類し管理していたことがわかりました。これにより、どのような文書がどういった理由で残されたのかを理解する材料になると判断し、この分類を活かして整理を進めることにしました。



五十子善三良の分類例

さて、右の写真の茶封筒は、「自治記念塔建設関係」と名付けて、関係する文書を一括したもので、左下には文書取扱人として「五十子主事」の名前を見ることが出来ます。

この記念塔は、東京市郡併合となり村制以来の自治を永久に記念するため高田会館（法明寺

境内）入口側に西面して建設され、昭和七年九月二十九日に除幕式を挙げました。『高田町史』には左の写真が口絵として掲載されております。

現在はその姿を見ることができませんが、記念碑の下図面や公共事業に多年尽力した当時の法明寺住職であった近江正瑞氏に厚意を寄せ、建設地とした所以が書かれた草稿などが確認できました。

このように「旧高田町公文書」は、高田町長海老澤了之介が行なった公共事業等を通じて、大正九年から昭和七年までの町政を知る上で貴重な資料であり、さらなる区政史研究の材料として欠くことのできないものになるでしょう。（高木）

『高田町史』口絵より転載（著作兼発行高田町教育会、代表者海老澤了之介、昭和八年四月三十日発行）
※最前列右から三番目が町長海老澤了之介



二〇一三年度歴史講座『中世豊島氏とその周辺』を開催しました

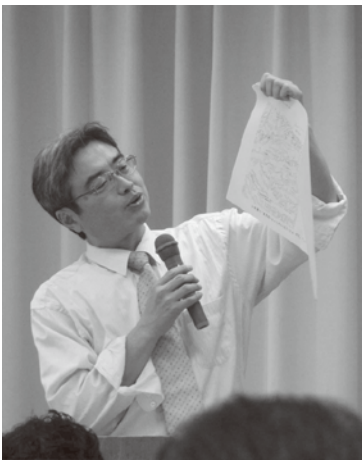
二〇一三年度歴史講座は、11月～12月にかけて『中世豊島氏とその周辺』と題し、古代末から中世にいたる豊島氏の消長を辿る講座を四回にわたって豊島区立勤労福祉会館の大会議室において開催いたしました。日程・論題・講師は、以下の通りです。なお、この講座には80人程の申し込みがありました。

- ① 11月9日 『秩父平氏と武蔵国／豊島氏成立の前提』 落合義明氏（東海大学）。
- ② 11月16日 『平安・鎌倉時代の豊島氏』 小松寿治氏（板橋区立郷土資料館）。
- ③ 11月30日 『南北朝・室町期の豊島氏』 今野慶信氏（新宿歴史博物館）。
- ④ 12月7日 『十五世紀の城館と豊島氏』 齋藤慎一氏（江戸東京博物館）。



落合 義明 氏

館の開館以来何回か開催してきましたが、今回は豊島氏が歴史上に姿を現すまでの前史から見直すことにより、豊島氏の歴史ひいては豊島地域の歴史をより深く理解することをも課題として、第一回の講師を落合義明氏にお願いしました。秩父平氏にかかる最新の研究成果について、当館の講座で取り上げるのは初めてのことです。秩父平氏の歴史とその流れを汲む豊島・江戸・畠山・河越各氏ほかの動向と本拠のあり方、さらに秩父氏の拠点の一つと目され近年実態が分かって来つつある埼玉県嵐山町に所在する大蔵館の最新調査・研究成果の紹介など、興味深い報告を頂きました。



小松 寿治 氏

にかなり没落するまでの歴史過程を取り上げました。報告をお願いした小松寿治・今野慶信両氏は、一九九七年に開催された『豊島氏とその時代』シンポジウムに参画されていますが、その成果は翌年『豊島氏とその時代』（新人物往来社）と題して出版されており、ご存じの方も多いことと思います。実は、豊島氏の研究はこのシンポジウム以降やや停滞していくようにも思われるのですが、お二人からはこの間の研究成果を含めて、豊島氏研究を進めていく上で欠くことのできない基本資料を駆使した報告を伺う事ができ、充実した豊島氏研究の入門編最新版とも言えるものになりました。



今野 慶信 氏

す。第四回は、この間の城館研究をリードしてこられた齋藤慎一氏に、15世紀の城館の姿を近年の研究動向を踏まえて14世紀以前に遡った所から説き起こして紹介して頂くと共に、城と館という言葉が本来意味している内容に踏み込んだ解説を頂いた。さらにその上で、豊島氏の城館である石神井城・練馬城が中世城館の歴史のなかでどのように位置づけることができるのかをお話し頂きました。

以上四回にわたるいずれの報告も内容が濃く、一九八八年の『豊島・宮城文書』刊行以来豊島氏の歴史に関心を持ってきた当館の歴史講座に相応しい内容になりました。（橋口）



齋藤 慎一 氏

新連載「絵はがきは語る」(6) 50年前の観光名所

二〇二〇年に東京オリンピックの開催が決定しましたが、今から五〇年前の一九六四(昭和三九)年一〇月、第一八回オリンピック東京大会が開催されたことをご存じの方も多いでしょう。この大会を契機に、新幹線や高速道路などの都市

基盤整備が進められましたが、豊島区では、一九六一年に池袋東口に総合庁舎が完成し、西口ではマーケット(ヤミ市)の取り壊しが始まり、翌年には東武百貨店が開店するなど、池袋駅を中心に再開発が進められ、副都心へと変貌を遂げます。また二〇余の映画館が池袋に集中するなど多くの人が集う歓楽街として賑わ



写真①「東武デパート」



写真②「高田工業地帯」

いをみせます。一九六五年の池袋駅の一日の平均乗降客は一三〇万人を数え、乗客数だけで東京駅を超えて全国一位となり、人口は三七万三千人に達し、人口密度日本一の過密都市となりました。

左の写真は、東京オリンピックが開かれた一九六四年に、豊島区と豊島区観光協会が作成した「としま」と題する六枚組の記念絵はがきです。袋には総合庁舎の完成を記念して一般公募で制定された「豊島民謡」の歌詞が印刷され、裏面には区の概況と略図が描かれています。

写真①「東武デパート」は、「ターミナルデパートにふさわしく家庭的な雰囲気をもつ

た明るい店内、行届いたサービス(中略)、6階には結婚式場、7階に名画劇場があるシーン

ツピングとレジャーのデパートです」との説明があり、手前には東武百貨店の開店と西口駅前広場完成を記念して設置された「希望の像」がみえます。

写真②「高田工業地帯」は、明治期以降、染織・衛生材料・製薬関連の工場地帯として発展した現在の高田三丁目を撮影したもので、手前の神田川から奥の学習院にかけて工場が密集している様子がわかります。「地域的需要に応じた文化産業として、軽工業部門でも、また都内の工業地帯のうちでも特異な地位をしめている」との説明があり、区内工場数一七三一のうち、約一八%が繊維・衣服関連、一六%が出版・印刷関連業でした。

このほかに「池袋スケートセンター」、「立教大学と学習院大学のピラミッド教室」、「雑司ヶ谷鬼子母神とすすきののみずく」、「とげぬき地蔵尊」が絵はがきになっています。スポーツと教育の殿堂、歴史と信仰の地が当時の観光名所として選ばれたことがわかります。

その後、池袋を中心にサンシャインシティ、東京芸術劇場、あうるすぽっと、中央図書館など文化施設が次々と誕生し、現在は新庁舎が建設中です。今の豊島区を絵はがきにするなら、皆さんはどんな場所を選びますか。(横山)

編集後記

「かたりべ」一一〇号をお届けいたします。諸般の事情から、発行が大幅に遅れてしまい、「かたりべ」愛読者のみなさまには大変なご迷惑とご心配をおかけいたしました。深くお詫び申し上げます。なお、本年度は引き続き一一一号の刊行を予定しております。楽しみにお待ち下さい。

さて、鋭意進めておりました新館の開設準備は、建設費高騰の影響を受けて、予定していた計画通りには行かなくなりました。資料館職員一同、心機一転頑張っています。今後もより一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。(は)

かたりべ
No.110

2014年2月7日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>